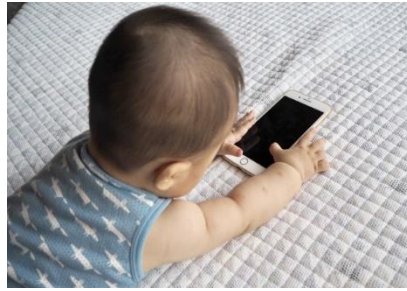


デジタルネイティブ世代の子どもたちにこそ伝えたいかつてのアナログ習慣

Apple社の初代iPhoneが世に出たのは2007年6月29日のことだったそうだ。そこから約14年の歳月が経ち、筆者も含め、恐らく多くの人たちにとってスマートフォンがない生活にはもう戻られなくなっているだろう。

では、子どもたちはどうだろうか。大人たちは昔の不便さを知っているが、生まれたときからスマートフォンが身近にあり、それがあって当たり前だという認識の子どもたち、いわゆるデジタルネイティブの子どもたちはその前の時代では当たり前であったものの不便さを知らない。



赤ちゃんにとってもあって当たり前の存在となったスマートフォン

例えば、連絡手段は微信があたりまえの彼らは、手紙や年賀状を知らない。お小遣いやお年玉をアリペイや微信ペイでもらえる彼らは、小銭貯金も必要がないし、現金でお年玉をもらったときの数えるドキドキも知らない。分からない言葉や知らないことがあったときは、百度を使えばすぐに教えてくれる。分厚くて重い紙の辞書なんて、もしかすると展示品でしか見たことがないかもしれない。待ち合わせ場所への行き方がわからないときは、ナビを使えばついて行くだけでたどり着けるから、紙の地図を広げて自分で道を考える必要もない。

どれもとても便利だ。だけれども、少し味気がない。効率がよくて時短であるといえば聞こえもよい事実ではあるが、試行錯誤や失敗など一見無駄に見えるものから学べるものもたくさんある。

中でもとりわけ、声を大にしてここで伝えたいのは、小銭と手書きの習慣である。キャッシュレス社会の今となっては、財布の中に小銭があると重たくて嵩張り、支払う際も数える手間があるなどの理由で敬遠されがちである。だが、小銭やお金の意味をまだ理解しきれていない子どもたちは、大人がスマートフォンを使って「ピッ」とかざすだけで買い物ができ

る、物がもらえると認識してしまうので、彼らにとってスマートフォンはお金を払うツールというよりもほしいものを何でも与えてくれる魔法のデバイスなのである。

お金の価値やどうしてお金が手に入るのかということ子どもに知ってもらうためには、目に見えないキャッシュレスではなかなか伝えることが難しい。そのためにも、まずは、目で見えて手で触れる実物の小銭を使って教えてあげる大事である。子どもがお金に触れる機会として、毎月決まった額のお小遣いを親が子どもにあげるときや新年を迎えるときのお年玉で親族などからもらうときがある。お年玉については以前の記事でもご紹介しているので、そちらも是非合わせて読んで頂きたい。今回は小銭、とりわけお小遣いの扱い方について述べていきたい。

筆者の家でもお金の教育として、お小遣いを与えるべきかどうかでかなり考えた。その結果、お小遣いで与えるよりも、お手伝いなどの労働の対価としてお金を与えることのほうが実社会に近いと思いお手伝い制にした。これは、子どもにお金は天から降ってきたり地面に落ちていたりするものではなくて、きちんと働いたから、その対価として頂けるものなのだという事について身を持って知ってほしかったからである。

下の表は筆者の家にあるお手伝い表の一部。項目を選定した基準にも譲れないポイントがある。「何かをしたからお金がもらえる」のではなく、「誰かの役に立つことをしたからその対価としてお金が頂けた」ということを考えて選んだ。だから、自分のランドセルを片づけたということは、誰かの役に立つことやお手伝いではないので、除外している。

対価として与える金額に関しては、今は幼稚園と小学校低学年の年齢なので、あえて低めに設定している。金額はお年玉と同じように、年齢が上がるにつれて徐々に見合った金額に設定しなおせばよい。

掃除機をかける	廊下	10円
	キッチン	10円
	リビング	20円
洗濯	干す	20円
	取り入れる	10円
	畳んでしまう	20円
お風呂掃除	-	30円
ごみ捨て	-	20円

お手伝い表の一例

大事なのは、子ども自身がおうちのお手伝いとして、「掃除やお風呂洗い」をがんばったからそのお礼としてお金が頂けたということを認識できること。そして、お礼として渡すお金は目に見えないキャッシュレスよりかは、実体がある小銭のほうがより実感が湧く。貯金箱に自分が働いて頂けた小銭を貯めておくのも良いだろう。日に日に増えていくのも働くモチベーションの一つであり、働いて感謝されることも働く意欲となる。そして、小銭が多くなったら親が銀行になってお札などに両替してあげる。1元玉が10枚と10元札が1枚は同じだということを教えてあげれば算数の足し算の勉強にもつながるし、繰り上げや大きいくらいの数を数える勉強にもなる。生活の中の実体験からの学びは、教科書からの学びよりはるかに子どもの記憶に残る。是非とも身近でできるこの機会を活かして頂きたい。

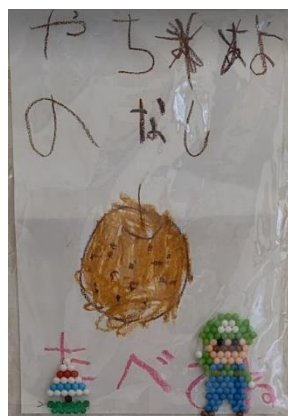


お気に入りの手作り貯金箱から一年間貯めた小銭を出して数える様子

そして、書くこともまた、小銭にも劣らず大事なことである。一説には、手書きによるメモはパソコンでのメモよりも記憶への定着率が高いという研究結果があるそうだ。パソコンやスマートフォンで文字を打つときの脳はあまり活動しないそうだが、その一方、手で書くときはより活発に動いて働くそうだ。筆者も仕事柄、パソコンやスマートフォンを使って作業する時間が長いですが、文章を書く前の思考の整理段階では、ノートや紙に書いてからのほうがいざパソコンを開いてから書き終わるまでの効率がいいように感じる。

今ではあまりしなくなってしまった手紙についても、是非とも子どもたちに経験してほしい。微信を使えばテキストや音声メッセージを瞬時に送ることができるし、電話やテレビ電話を使えばあっているような感覚で話すことができる。手紙は書いて届くまでに長い時間がかかるし、切手代もかかる。面倒な作業は多くあるが、書いている間にどのように書こうと考えれば脳は働くし、何回も書き直してあとに集中して書くときはかなりの緊張感と力が入る。プレゼントをするときにも、物だけでなく手書きの手紙やカードがついていたらより一層嬉しく思う。届いたときのみならず、思い出したときに手に取って思いをはせることもできるし、目の届くところに飾っておくことで毎日の生活の励みにすることもできる。

コロナ禍によって新年のご挨拶も微信での一斉送信になったり、画像スタンプになったりすることが多くなっている今、たまには手に筆をとり、実際に気持ちを込めて年賀状なる「賀年卡」を大切な人に向けて送ってみてあげるのもいいでしょう。きっと温かい気持ちになって喜んでくれることだろう。もし、お返しを書いてくれたのであれば、子どもたちにとっては初めて受け取るお手紙になるかもしれない。実体験は何にもまして貴重な財産となるはずだ。



祖母宅へ梨を送った際に書いたお手紙は壁に飾られてある

ここでは小銭と手書きの二つを例に挙げて述べてきたが、この二例以外にも、先に挙げた紙の辞書や地図、そしてそれ以外にも、ネットショッピングではなく実際の店舗へ赴いての買い物など様々なことが考えられる。「指先ポチっとのデジタル」だけではなく、「身体を動かしてするアナログ生活習慣」を親から子へ伝えていってほしいと切に願います。

子どもたちにとっても、不便を知ってからこそ、便利さがより一層ありがたく思えるし、不便に気付けるからこそそれを改善するための発想や発見が生まれる。子どもたちのより良い未来のためにも、大人たちがかつての生活を振り返ってみるのがおすすめである。

そして、もし可能なのであれば、大人たちが今興味関心を持って見ているこちらの客観日本の記事についても、関連書籍などを読んで知識を深め、いつの日か子どもたちを連れて実際に日本を訪れて知識の実体験をするのも良いものである。その一助となれたことは筆者にとっても幸いに思いますし、媒体となっている客観日本に対しても深く感謝のお気持ちを伝えたいと思う。

文: [原田捷子](#)

翻译编辑: JST 客观日本编辑部